

- * 主イエスはサマリヤの女の男性関係のことをすべて言い当てる。彼女はイエスが預言者だと思い、かねてから疑問に思っていた礼拝の場所はエルサレムが正しいのか、サマリヤのゲリジム山が正しいのかを問う。しかし、イエスは新しい、礼拝の姿を教える。「イエスは彼女に言われた。『わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。』(ヨハネ4 : 21 ~ 24) 礼拝の場所は神殿があるところではなく、どこでも礼拝できる、そういう時が今来ている、という。神を礼拝することは、イスラエルの人も、サマリヤの人も、全世界の人も変わらず、大切なことである。なぜなら、私たちはひとりひとり神によってつくられ、神は一人一人を愛しておられるからである。私たちは誰でも神を礼拝するために生まれて来たといっってよい。その礼拝は、今からは「霊とまことによって」しなさいと言われる。
- * 「神は霊である」とは、神は、目に見えない、五感に感じるができないということ、しかし、生きて働いている存在であるということである。また、人間は生まれつき「肉」の部分があるが、「霊」の部分も持っている。「霊に」よって礼拝するとは、五感とは別の、霊によって礼拝するということである。具体的には、神殿などの場所やいけにえなどの儀式律法にこだわるな、目に見える形に執着するなということである。従来礼拝の中心であった「いけにえ」は、イエス・キリストが自ら「いけにえ」となり、その血であがなってくださったので必要がなくなった。また、様々な礼拝に関する決まり事を守ることもより大切なことは、神様と交わる、イエス・キリストと出会い、交わることである。
- * 「まことの礼拝」とは、偽りのない自分を全部神にささげる礼拝である、自分の罪や弱さを神の前に隠さず表わして罪の赦しを求め、悔い改めることが必要である。神の前に自分を主張したり、高慢になったままでは、神は交わりをしてくださらない。こころを静めて神様と向き合うことである。「霊とまことによる礼拝」とは、主を100パーセント信頼し、砕かれたこころを持って、自分を無にして、主をほめたたえ、主のこぼれを聞くことである。それは「祈り」による礼拝ともいえることができる。